

埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況 (2008)

埼玉県で 2008 年に分離され衛生研究所で確認された三類感染症である腸管出血性大腸菌は、104 株でした。2008 年の検出数は前年の検出数には及ばないものの、依然として 100 株以上が分離確認されています。月別の分離株数で見ると、3 月を除いて毎月分離されており、例年どおり夏期に多い傾向がありました。分離株の血清型は例年通り O157:H7 が 67 株 (64.4%) と最も多く、ついで O26:H- が 20 株 (19.2%)、O26:H11 が 6 株 (5.8%)、O157:H- が 5 株 (4.8%) でした。O157:H7 の毒素型別では VT1&2 産生株が 37 株、VT2 産生株が 29 株でした。届け出時の成績では VT1 あるいは VT2 単独産生性であったものが、その後、衛生研究所で検討した結果、VT1&2 両毒素の産生性が確認された例がありました。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2008)

血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	37
O157:H7	VT2	29
O157:H7	VT1	1
O157:H -	VT1&2	5
O26: H11	VT1	6
O26: H -	VT1	20
O111:HUT	VT1	1
O91:HUT	VT1	1
O121:H19	VT2	2
O128:H -	VT1&2	1
O165:H -	VT2	1
合計		104

集団感染事例では、8 月中旬に県南部のグループホームにおいて入所者 14 名中 6 名から O157:H7 (VT2) が分離されましたが、職員および付き添い 19 名からは分離されませんでした。また、同時期に県東部の保育所において O26:H- (VT1) が園児およびその関係者 18 名から分離されました。いずれの事例においてもその感染経路は不明でした。

PFGE 法を用いた DNA 切断パターンによる型別では、O157:H7 (VT1&2) 37 株が 15 パターン、O157:H7 (VT2) 29 株が 14 パターンに型別されました。集団感染事例をのぞく散発事例においても集積性が見られるパターンがあり、東京都や千葉での分離株と一致した株もありました。共通の感染源が示唆されましたが、その究明には至りませんでした。